

あしながてなが
足長手長 3

こえ き
ぼうさまの声を聞いて、
あしながてなが
足長手長が、雲の上からのっそりと
すがたをあらわします。

おも
「でゆふふ。だれかと思ったら、きたないぼうずが一人かよ。」
「こいつ、なまいきだなあ。食ってやろう。」

い
しかし、ぼうさまは、こわがることもなく言いました。

あしながてなが
「おい、足長手長。おまえたちは、何でもできると思っている
なん おも
ようじゃな。しかし、ほんとうはおまえたちにできないことも
ある。そのことをおしえてやろう。」

「でゆふつ。おれたちにできないことなんぞ、あるものかよ。」

あしなが
足長は、ぼうさまを見下ろしながら言います。
み お

い
「ならば、わしの言ったとおりをやってみよ。できねば会津か
あいづ

問――①「そのこと」とは、どんな
ことですか。

あしながてなが
ア 足長手長は、できないことが
あるということ。

あしながてなが
イ 足長手長には、だれもかなわない
こと。

あしながてなが
ウ 足長手長は、べんきようがにがて
であること。

「」

ら出^でて 行^いってもらうぞ。」

「ひゃっひゃっ。どんなことでも、やってやるさね。さあ、言^いってみな！」

手長も、すっかりぼうさまをばかにしているようすです。

足長手長が言^いうのを聞^きいて、ぼうさまは。小^{ちい}さなつばを^て手の

ひらにとり出^だします。

「足長手長よ。おまえたちは、ずいぶん大^{おお}きいようじやが、さ

すがにこのつぼの中^{なか}に入^{はい}ることは、できまい。ほれ、ほれ、で

きぬであろう。わっはっは。」

と、大^{おおこえ}声^{こえ}でわらいました。

わらわれた足長手長は、「むっ」とおこった顔^{かお}になっ

て、「何^{なに}を言^いうか。わしらにできぬことなど、ないわ。」

と言^いって、しゅわしゅわ^{ちい}と、小^{ちい}さくなり、あっというまに

小さなつぼの中に入ってしまった。

それを見たぼうさまは、さっとつぼのふたをしめて、それから、自分のきていた法衣（おぼうさんのきもの）のすそをすばやくちぎって、つぼをしっかりとつつみます。

「でゅふっ？」

「ひゃっ？」

とじこめられた足長手長は、あわててつぼから出ようとしませんが、もう「②」です。

「おい、出せ！ 出さないか！ ふたをあけろ！」

つぼの中で、足長手長が、大声を出してあばれまわりますが、どうやってもつぼから出ることができません。

ぼうさまは、そのつぼを、磐梯山のちようじょうにうめると、上から大きな石をのせて、にどと出てくることができないよう

問2 「②」には、「気がついて

もうおそい」といういみのことばが入ります。そのことばを□のひらがなをならべかえて、かんせいさせましょう。

「

あまつのりと

にしました。

むらびと

「村人たちをくるしめたばつじや。おまえたち二人は、この山

ふたり

やま

がみ

のまもり神としてまつてやるから、これからは村人たちのた

ぼんち

めに、この盆地をまもるのじや。」

あいづぼんち

こうして、会津盆地には、また明るいお日さまがもどってき

あか

ひ

はたけ

だ

ました。これからは、あんしんして畑しごとにせいを出すこと

ができます。

さて、あのたびのぼうさまですが、じつは、あの弘法大師さ

③こうぼうだいし

まであったのだそうです。

いま ばんだいさん

今も磐梯山のちようじようには、足長手長をまつた磐梯

あしながてなが

ばんだい

みようじん

明神があります。

(おしまい)

問3 — ③つぎのことわざの「弘法」

こうぼう

とは「弘法大師」のことです。「」に

こうぼうだいし

あてはまることばをえらんで、ことわざ

をかんせいさせましょう。

こうぼう

弘法も「

」

ア 木から おちる

き

イ けいさん まちがい

ふて

ウ 筆の あやまり

エ あるけば ぼうに あたる